



子どもは未来をつかみたい

特定非営利活動法人 **ラオスのこども**

2004年度 年次報告書

2004年7月1日－2005年6月30日

2005年度 年次計画書

目次

2004年度 事業報告	
この1年	1
出版プロジェクト	2
読書推進運動	3
子ども文化センター	5
国内事業	6
組織運営	7
2004年度 会計報告・2005年度 収支予算	9
2005年度 事業計画	10

ボランティア 役割と責任、参加、保障などを定めた、ボランティア契約書を結び、明確な合意のもとで活動できるよう改善します。定期的な活動説明会とボランティア研修を行い、参加を促します。

活動理念がラオスで共有され、現地での担い手、支援者が増えるよう、ラオス人留学生に会の理念、使命を伝える機会を増やし、帰国後の連携を可能にします。

運営会議 進行の効率化と論点の明確化により時間を短縮します。参加者の10%増をはかります。勉強会等、会員との幅広い知識の共有をすすめます。

中期計画 第3次中期計画の毎年の実行計画について、達成状況のチェック、改訂作業を会員と行います。

ラオス事務所計画参加 新体制となったラオス事務所とより積極的に話し合い、活動、理念の共有化を進める必要があります。また都市型の子どもの問題の現況を把握するため、情報を交換し、必要なプロジェクトの立ち上げ準備をすすめます。

各プロジェクトでも、ラオス側参加による、年度ごとの評価会議を開催するよう努力します。

■東京事務所

体制 常勤専従スタッフ1名、非常勤スタッフ1名、常勤非専従事務局長で運営します。業務の優先順位を明確にします。アルバイトの雇用、ボランティアの方の参加を高め、過重な労働の軽減、迅速な対応、問題の解決に取り組めます。人事考課の効果的運用について工夫と試行を重ねます。新人雇用にとまない、研修の機会を設定します。

資金調達 支援者に的確な対応ができるよう、支援者データベースを改善します。

寄付を促す寄付メニューを開発します。

ご支援いただいている方への、報告書作成のスピードと質を向上させ、満足いただけるようにします。

■ラオス事務所

体制 ラオス人スタッフ7名、日本人駐在スタッフ1名の体制で運営します。所長を補佐し、スタッフの能力向上のため、顧問を1名配置します。各関係機関との連携を強めるようにします。

活動理念の共有をすすめるため、使命・理念・活動計画をラオス語にします。運営ルール、業務分担範囲の文書化をすすめ、活動の透明性を高めます。

スタッフがプロジェクト運営能力、専門性を身につけ

るため、研修を行います。

活動の自立の準備、東京事務所の人手不足を補うために、より高度な業務処理をおこなえるようにします。

資金調達 各種広報資料の内容を充実させ、外国政府機関、NGOなどからの資金調達を、昨年度の20%を目標に増やします。

広報 新団体名を定着させるため、積極的な広報活動を心がけます。各国NGOと連携したプロジェクト展開を増やす目的で、プロジェクト内容の広報を活発化します。パンフレット、プロジェクト別説明資料、年次活動報告書など、ラオス語および英語の広報資料を整備します、英語版のホームページの作成をすすめ、ラオスで活動する国際NGOを紹介するホームページにも情報が提供できるようにします。情報発信の主体となれるよう、海外向けを中心に、ラオス事務所主体の広報物を増やします。

イベント 会の活動を広く認知してもらうために、子どもやNGOに関わる各種イベントに、積極的に参加します。そのために、参加基準、訪問受入基準を早急に作成する必要があります。さらに、主催イベントを実施し、ラオス社会での存在感を強めるようにします。

対外活動 教育に関わる活動をおこなっている団体との交流、情報交換をより深め、相互に利点を生かせるような、協力関係を築いてゆきます。



ラオス事務所スタッフ

■2005年度役員

理事 チャンタソン インタヴォン(共同代表)

森 透(共同代表) 野口朝夫(事務局長)

小沼千秋 風間美苗 塩谷 光 小川直美

近藤知子

監事 野口賢一

大いなる達成と未達成とが、はっきりしたこの1年でした。

プロジェクトは理念、方法論、現地での体制など第3次中期計画に基づき、比較的順調に推移し、成果を上げることができました。とりわけJICAとの開発パートナー事業について、外部専門家による3カ年をまとめる活動評価がおこなわれ、高い評価を受けることができました。これは、これまでの活動経験の蓄積が生かされたこと、ラオス事務所の能力の向上などによると考えます。さらに、現地駐在スタッフとの緊密な連携により、プロジェクトの問題点の修正、ラオス事務所運営の詳細な把握がおこなわれたことで、活動の安定化と質の向上につながりました。

その一方で、この数年、会の運営上最大のテーマとなっている、「東京で現地プロジェクトをどのように継続的に支える体制をつくるのか」という課題に対しては、さまざまな試行を重ねたものの、十分な組み立てができず未解決のまま残りました。

多くの小規模NGOには、プロジェクト（夢）を語ることは熱が入るが、組織運営強化（資金調達）については、どうしても後回しになってしまう傾向があります。私たちの会もその体質から残念ながらまだ抜け出せていません。これは一つに人材配置の余裕の無さから起因しているのですが、より組織的な活動を志している今、どうしても解決せねばならない優先課題として理解しています。私たちの活動への支援者を増やし、活動資金の調達をいかに多様化して安定させるか、会員制度の見直しを含め、模索が続いています。

アセアン首脳会議が11月にヴィエンチャンで開かれるなど、ラオスの開放化がどんどん進んでいます。ラオス社会の転換は数年前から顕著となり、子どもたちを取り巻く環境も大きく変わってきています。これまでの農村型の、教育に触れられるチャンスがない子どもの問題に加え、消費主義的社会がもつ都市型の問題へと様相が多様化しています。この問題に対応すべく、これまで10年にわたり支援を続けてきた、子ども文化センター活動を多様化する試みが始まっ

ています。

一つはこれまで事務所に併設していたヴィエンチャン子ども文化センターを改変、ヴィエンチャン都教育委員会が運営主体となる「子ども教育開発センター Children's Education Development Center (CEDC)」として再発足しました。これは、教員の研修施設の中に、子どもが自由に活動する場を設けるという新しい発想に基づく、研修と実践の総合的施設です。教員の再研修過程で、子ども文化センター活動に触れる機会を持つことで、教育現場の改革につなげてゆこうという考えで運営されます。

ラオス社会の変化に対する対応としては、「本をもらうものから買うものへ」というテーマで、本の販売の模索も始まっています。

このように、現地事務所との緊密な連携が、これまで積み上げてきた経験を、より効果的な活動へと結びつけており、ラオスのこどもたちにとり、今何が必要か、今後のために何をしておいた方がいいのかと、的確な判断とともに、より地に足のついた活動になっている実感があります。

一年間のみなさまのご支援に感謝をしつつ、活動報告をさせていただきます。

2004年度活動状況



出版プロジェクト

この1年

- 出版委員会は5人体制に。内1名は専従
- 絵本は、6作品23,000冊を出版
- 通算105作・総部数約50万冊となる
- 紙芝居は3作品を出版

I. 出版

本年度は絵本6タイトル23,000冊、紙芝居3タイトル6,000冊、計9タイトルを出版しました。

資金調達が予定通り進まず、出版点数は計画より約30%下回りました。編集作業は終えながら、印刷費が確保できず、出版できない作品は4点です。

出版委員会と昨年度に合意した方針に基づき、民話、翻訳物などの多様な図書を、幼稚園、小学生、中学生など読者層別に出版しました。

また、ラオス教育省より新学期に配る教科書が足りない、との緊急要請を受け、今年度限りの特別支援として小学校1・2年生の国語と算数の教科書を印刷しました。

II. 出版委員会

絵本の量、質、多様性の向上を図る調整役として、出版委員会を設けています。7月より非常勤スタッフとしてブンルート氏が運營業務を行っています。委員会は月1回開催されるようになり、年間計画の作成、出版候補作品の原稿チェックをはじめ、業務は円滑に進みました。

原稿料・編集料のガイドラインを作り、デザインワークの依頼先も複数化し、見積も、より透明化されました。しかし、本の質の向上にはまだ繋がっていません。

III. 出版作品 (作品名/著者/出版部数/主な支援者)

1. 絵本

■ 創作

『詩で読む民話』 フンルアン(文) ソンハヴァン(絵)
5,000部 JICA

『数字ちゃんはどこ』 ブンルート(文・絵)
5,000部 指定募金・アサヒビール

■ 再版絵本

『シートマンノラー』 シーサヴィ(文) ディムカー(絵)
5,000部 JICA

『マニユイとチャンタイ』 シーナイ(文) カムソン(絵)
3,000部 今井記念海外協力基金

『くすりやさん』 マンボン(文) 他2名 トゥアンパチン(絵) 他2名
3,000部 今井記念海外協力基金

■ 翻訳絵本

『長靴をはいた猫』 ペロー(文) シッコー(絵と訳)

1,000部 フランス語協力センター 自己資金 *注

*注 現地で有償提供した図書売り上げで出版



紙芝居『森のおばけと汚い水』

2. 紙芝居

『家のまわりの冒険』 (改訂版) ブンルート(文・絵)

2,000部 国際ボランティア貯金

『森のおばけと汚い水』 (改訂版) ブンルート(文・絵)

2,000部 国際ボランティア貯金

『サカナちゃんのお留守番』 (改訂版) ブンルート(文・絵)

2,000部 沖電気工業

3. 教科書

小学校1年用ラオス語 5,000部 日本国際協力財団

小学校1年用算数 5,000部 日本国際協力財団

小学校2年用ラオス語 5,000部 日本国際協力財団

小学校2年用算数 5,000部 日本国際協力財団

IV. 長編コンクール

絵本の作り手を発掘し、出版の多様化のため、長編コンクールを予定していましたが、準備が間に合わず実施できませんでした。

VI. 書店を開く、本を販売する

出版した本を他のNGOに有償譲渡し、収益の確保を目指しています。ロコミなどによって、有償譲渡冊数も増えています。

書店の出店計画は、事務所に図書販売スペースを設けることからスタートします。読書推進イベントなどを通して、都市部では図書を買う層ができてくることが感じられ、図書販売の実現性が高まっています。

VII. 資料コーナーの設置

絵本を作ろうとする人々の参考になるように、ラオス事務所内に絵本の資料コーナーの設置を計画しています。

読書推進運動

この1年

- JICAとの開発パートナー事業が本格化
- 図書箱・図書袋の配付は計画通り実行
- 読書推進運動の自立を目指し人材育成を継続
- 増大する図書補充対象への対応が課題

I. 本を読む環境の整備

■ 開発パートナー事業

この事業は、以下の活動を3年間（2005年11月まで）で行うことを計画しました。

- ① 出版：6タイトル、計3万部
- ② 図書箱・袋の新規配付：小学校1,000校
- ③ 図書の補充：小学校1,000校
- ④ 教員研修：配付時に実施

今年度は下記の活動を計画通り実施しました。

- ① 2タイトル10,000部を出版
- ② 図書箱270箱、図書袋140袋をチャンパーサク県、サラワン県の小学校340校に配付
- ③ 上記2か所で配付時に各3日間のセミナーを実施
これによって、本事業での図書箱・図書袋配付は完了しました。
- ④ これまで図書箱、図書袋を配付したボーケオ県、カンムワン県、セコン県、ヴィエンチャン都、ヴィエンチャン県の5県の小学校360校に図書を補充。

⑤ 5か所で各3日間のフォローアップセミナーを実施し、図書の補充、利用状況調査を実施。
2月には、これまでに図書を配付した10県の教育局読書推進担当者、および配付対象地域の教育指導官の中から選抜された各県1名の教育指導官を対象に、読書推進活動の先進地域であるサイヤブリ県にて、読書推進活動指導研修を実施しました。読書推進活動の活性化のヒントを学ぶと同時に、参加者同士で意見を交換し、担当地域ごとに実行計画を作成するなど、今後の地方での読書推進活動を進めるうえで、有効な研修となりました。

5月、JICAおよび評価コンサルタントによる終了時評価を実施。配付対象地域3県7校での実地調査、当会、国立図書館等の関係者へのインタビュー、読書推進活動報告書のデータ分析に基づき、プロジェクトの評価を行いました。

評価ポイントは、「子どもたちが自主的に読書をする

ようになる」というプロジェクトの目的は達成されているか、このプロジェクトが目標に適った内容となっているか（妥当性）、効率的に進められているか（効率性）、プロジェクト終了後も、その社会に定着し、自立的に発展を遂げていきそうか（自立発展性）、などです。
評価速報によると、プロジェクトの目的はほぼ達成されており、図書の配付はラオス語の読み書きの向上や、子どもの学習意欲の向上、授業内容の改善など、教育現場の活性化にも貢献しており、また地域住民の協力により図書室が生まれるなど、地域への波及効果も認められ、概ね高い評価を受けました。

開発パートナー事業の実施を通して、図書を少しずつでも補充していくこと、学校を訪問して助言を行うことが、読書推進活動の継続のカギであることがわかりました。この2年半で学校や県教育局などラオス側の地方の人材が育ってきており、読書推進活動も自立の方向が見えてきた、といえます。一方で、学校自身で図書を調達するしくみが求められています。当会はこのプロジェクト終了後、次の段階として、ラオス側関係者が自立的に読書推進運動を担っていくための仕組みを構築することが、この運動の自立的発展に寄与する、と考え、「学校から地域へ」、「無償から有償へ」、「中央から地方へ」をキーワードとして、読書推進運動支援事業、フェーズⅡの提案を検討しています。

（JICAとの「開発パートナー事業」）



学校図書室で本を読む子どもたち

■ 学校図書室（ハクアーン）整備

小・中・高等学校の空き教室などを利用して、愛読を意味する「HakArn（ハクアーン）」と呼ばれる学校図書室を開設する活動です。数多い開設希望の中

から、熱心な先生がいるなど、学校の状況を調査した上で、開設を決定し、図書と読書用の机椅子などを整備、開設時には読書推進活動のノウハウを提供しています。

今年は、小学校25校、中学高校7校、幼稚園3園の計35校に開設。さらに既存開設校100か所に図書補充を行いました。今年はカナダファンドからの支援などもあり、例年の倍以上の図書室を開設することができました。

会が支援したハクアーンは、全国135か所となりました。設置方針として、小学校より高校、小規模校より大規模校と、優先順位を明確にして取り組んできました。これまで小学校に併設されているなどのことから対象としなかった幼稚園も、本年より開設の対象に入れ、ボリカムサイ県の3園に図書室を開設しました。ハクアーンは様々な広がりを見せ、地域開発を支援するNGOや外国政府、学校建設をしているNGOなどから協働の依頼が増えています。図書箱・図書袋を配付した学校でも、親たちの協力を得て学校自身で図書室に改装するなど、自主的な取り組みも広がっています。

当会は、こうした取り組みを他校にも紹介し、学校の自助努力を促していますが、社会全体に本が不足している現状では、まだ学校自身で急に図書を増やすことは難しく、図書の補充は図書室開設と同じように大切な活動となっています。

しかし、支援の結果が目に見える開設に比べて、補充の成果は形や数字に表れにくく、ご支援を得にくいのが現状です。学校が図書を調達する力をつけるまで、いかに図書を絶やさず補充しつづけるかが重要な課題です。

(ご支援: ベルマーク教育助成財団、東京海上日動火災保険(株)、三井住友銀行、上野年映、(財)豊島福祉基金、水野義弘、民際センターラオス(協働)、カナダファンド、GAPE、L-JATS)

Ⅱ.自立へ向けた人材育成

■教員養成校「読書推進カリキュラム」支援

学校に図書を配付し、先生にセミナーを実施しても、異動や退職で読書推進活動が途絶えてしまう学校があります。当会は、すべての先生が読書推進の必要性を理解し、実践できることが活動継続のカギと考え、2001年からラオス全国8か所の教員養成学校で、読書推進の意味を伝えるカリキュラムを設置してきました。学生向けではなく、講師向けで、その

人たちが学生(先生の卵)を指導できるようになることが目的です。

8月、教員養成校の読書推進講座担当教員(53名)が参加し、サワナケートで5日間の講師養成セミナーを行いました。セミナーは今年3回目で、参加者の要望に応え、紙芝居などでスキルアップを図りました。また、それぞれの教員養成校での読書推進セミナーは、5校で10～12月に各4～5日間、集中講義形式で実施。当会とラオス国立図書館は指導員を派遣しました。3校ではすでに特別活動指導課程などの科目に組み入れられ、当会がフォローアップを行いました。

3月、このプロジェクトの評価会議を行いました。教員養成校で読書推進活動課程が正式に導入されるのは2007年度と決定。「カリキュラム化の検討開始から5年で実現することになったのは異例の早さ」とのコメントを教員養成局より頂きました。また、カリキュラム化された後に使用するテキスト(学生用)の編集作業を行いました。



読書推進セミナーで読み聞かせを行う先生

Ⅲ.普及・啓発活動

■読書啓蒙雑誌発行

出版委員会を中心に編集、継続して発行の予定でしたが、内容の充実を図るための話し合いが長引いたことと、資金が十分に確保できず、発行できませんでした。

Ⅳ.特定受託事業

- 和光石原奨学金 教員養成学校生徒対象奨学金支給
- 特定小学校への図書及び教材支援への協力
- Save the Children UK の依頼により、3月に3県15校を対象に、図書箱配付及び読書推進セミナーを実施(セミナーはヴィエンチャンにて開催)

子ども文化センター（CCC）

この1年

- 1都3県の9館の運営を支援
- 自立へ向けた資金低減方針を継続
- 薬物汚染・非行などの増加から、子どもの健全育成の場としてCCCへの注目が高まる
- ヴィエンチャン市で教育活動開発センターが完成

I. 広がりと定着

子ども文化センター活動は、管轄する情報文化省大衆文化局にセンター担当が設置され、全国13県20か所に広がっています。

当会による支援は、ヴィエンチャン、ボリカムサイ、サイヤブリ、ルアンパバン各県の大きなCCCと、ヴィエンチャン都シーサタナーク区、サイヤブリ県ゲンタオ市、ボーテン市、パクライ市の小さなCCCに、今年はヴィエンチャン市郊外で個人が運営する「ノンセンチャン教育開発センター」も加わり、合計9か所です。

II. 青少年ボランティアの活動

各CCCでは、絵画・伝統音楽・伝統舞踊・歌・ゲーム・編み物・織物・英語・演劇・彫刻・工作・粘土・人形劇・スポーツ・料理・詩・読み聞かせなどの講座が開かれています。中学生までが参加し、卒業すると、年下の子どもたちをサポートしたり、キャラバンを組んで郊外の学校に出かけ、自発的にセンター活動を広げる活動も定着してきました。

III. ラオス社会の変化とCCCへの期待

都市部の一部の子どもたちに、薬物汚染や非行が見られるようになっていきます。CCCは、子どもに放課後の居場所を提供することで、非行から遠ざける場としても評価され始めています。

これまで読書推進活動を中心に、知的な発達を図ってきましたが、体を動かすプログラムとしてエアロビクスなどの導入を進めています。

IV. 自立へ向けた取り組み

当会からの子ども文化センタープロジェクトへの支援金額は、基本的に総額は増加させないという方針から、新しいCCCについては、これまでのCCCへの支援額を減らして回すことが合意されています。この方針により、大きなCCCでは積極的に資金源

の多様化を図っています。ただし、支援金額の減少は、当会の関与の低下につながり、理念の共有など、充分でなくなる不安もあります。

（ご支援: ミグレーション(株)、三井住友銀行、(社)中部建設協会、指定募金

V. 子どもが遊び、先生が学ぶ

「こども教育開発センター(CEC)」を新設

2004年4月、日本大使館を通してNGO支援無償資金協力により、ヴィエンチャン市教育局が管理する新しいタイプの子ども文化センターである「こども教育開発センター」(CEC)の建設が始まり、年内に完成、本年2月、教育局に引き渡されました。

CECは画期的な施設といえ、これまでのCCCが、子どものみが対象であったのに対し、CECは、教員の再教育施設でもあり、子どもとの接し方、読書推進活動の展開の仕方などを、現場で体験できるようになっています。先生方が子どもたちの活動に直に触れることで、従来の教科書を覚えさせる授業を変えようという発想が注目されています。

センターの運営はヴィエンチャン市教育局が行います。これに伴い、CCCの機能はCECに移しました。当面は当会スタッフが運営ノウハウの移転や活動指導などのサポートを行う予定です。

CCCの運営理念である、「子どもの権利を守る」ことの認識も、ラオスで広まりつつあります。毎年全国のCCC職員・子どもたちが集まって開催する「CCCフェスティバル」に替わり、今年はUNICEFの主導でCCC館長・職員を対象として1週間の「子どもの権利についての研修」が行われ、当会からは担当スタッフのチャンシーが参加しました。

(NGO支援無償資金協力)



子ども教育開発センターでの講座風景

国内事業

I. 広報

■ニュースレター

7月に31号2,500部、12月に32号2,200部、4月に33号2,000部の計3回6,700部を発行。はじめての方でも取り付きやすい記事を増やし、ボランティアによる記事を設け、ラオス現地の情報を多く載せるように工夫しました。

■ホームページ

ボランティアの協力により、定期的な更新を行うことができ、月約1,000件と10%ほどアクセスが増加しました。より見やすく、掲載情報の質をあげようと、ホームページのデザイン更新準備をおこなっています。

■イベント

昨年、監事から、事務局の体制に比し、参加するイベントが多すぎるという指摘をいただいたこともあり、会の活動を伝える主催イベントは増やすものの、全体として参加を減らす方針でした。しかし、参加イベントは、実際には計41回と増加しました。

会主催のものは、駐在員の報告会を4回開催(106名参加)し、支援者の皆さんに活動を具体的に伝えることができました。この1年間、イベントボランティアとして活動してくれた方は123名、内46名が留学生です。



イベントでラオス語文字を教えるボランティア

II. ラオス語絵本プロジェクト

国内活動の柱の一つです。今年、個人の方の参加は増えてましたが、企業参加が減り、送付冊数は788冊と20%ほど減少しました。企業や学校単位での参加を増やすためには、魅力ある総合イ

ベントとしての工夫が必要な時期になってきました。

ボランティアによる訳文の点検、整備、新しいタイトルの開拓などが進み、プロジェクトの質は向上しています。

III. 書き損じハガキ収集キャンペーン

1年間で計60件、50円の書き損じハガキ4,768枚相当、214,587円分のご支援をいただきました。絵本680冊分に当たります。残念ながら、目標の1万枚に達せず、昨年度より金額ベースで約30%の減少です。この反省から、書き損じハガキを事務局に送りやすい封筒の開発、配付を行い、より多くの方の参加が参加していただけるキャンペーンに育ててゆきます。

IV. インターン受入

今年度から、学習院女子大学と提携して、東京と現地事務所でのインターン生受入が始まりました。学校の積極的な姿勢もあり、連携して成果を残せるプログラムに発展させたいと思います。

V. 修学旅行受入

東京事務所に中学校、高校から修学旅行の一環として生徒を訪問させたい、という希望がこの数年多くあります。しかし受入は日常業務に大きな影響を与え、また参加する生徒たちの姿勢に満足できない点もあり、本年度は受入を行いませんでした。学習に必要な資料提供は、引き続き協力を行っています。

VI. ネットワーク活動

NGO全体の能力向上を目指す活動に、以下のように関わりました。

- ・国際協力NGOセンター理事（チャンタソン／共同代表）
- ・外務省NGO研究会（森 透／共同代表）
- ・教育協力NGOネットワーク研究会（森 透／共同代表）
- ・JANIC-UNICEF「南」の子ども支援NGO能力強化委員会（野口朝夫／事務局長）
- ・「南」の子ども支援NGOネットワーク（野口朝夫／事務局長）

組織運営

この1年

- 経営強化と参加拡大の両立を目指した
- 文書化により運営の透明性を増すよう努力
- 会員数は若干増加
- ボランティアのイニシアチブがイベントで顕著
- 運営意思決定へラオス事務所の参画拡大

I.全体運営

■理事会

理事会主導の組織として、今年度、理事会は計10回開かれました。理事(6名)は近年とみに多忙で、出席できない場合もあり、増員が必要になっています。監事の森千也氏は海外赴任により、辞任しました。

■会員

年度末での会員数は活動会員44名、賛助会員283名(内団体7)です。会員登録の呼びかけを進めた結果、昨年度に比べ50%ほど増加しました。

今年は昨年反省から、会員向け報告会を4回開催し、活動をご理解いただく良い機会となりました。

■運営会議

運営会議は活動会員とボランティアが参加し、今年度、計10回、延べ137人(内、理事とスタッフが46人)が参加しました。組織の意思決定事項に活動会員の意見を反映させる拡大理事会としての機能も備えています。

■2003年度通常総会

8月7日、特定非営利活動法人ラオスのこどもの第2期通常総会が、27名(活動会員23名賛助会員4名)の会員が出席し、ライフコミュニティ西馬込で開かれました。

■ラオス事務所計画参加

今年度、ラオス事務所のスタッフとの東京での話し合いは行いませんでした。しかし、駐在スタッフとの話し合いは日常化し、事業の評価、次年度計画など、東京と意識の共有化が図られています。活動の細部はラオス事務所で決定し、東京に報告する方式が定着しています。

■組織評価

日本評価学会による評価インターン出前サービスを

受け、組織運営評価が行われました。ポイントは、①積極的な参加を促し、②責任体制が明確であるかが中心で、理事、スタッフ、ボランティア、退職者などへのヒアリング、アンケート、事務の記録文書などをもとに行われました。

結果は、①情報共有の仕組みは整っている、②諸規定の文書の整備が十分でない、③財務の記録、④運営が属人的であるとの評価でした。

■中期計画

第3次中期計画の初年の達成の評価会議を計画しましたが、時間がとれず、達成状況の報告に終わりました。

II.東京事務所

■体制

9月、赤井がラオス事務所駐在となり、東京事務所は、ヴィエンチャンから戻った近藤がプロジェクトを担当。小川が国内業務を担当しました。アルバイトを採用しましたが、スタッフの過重な労働環境は改善できていません。

■資金調達

個人の寄付件数は225名(昨年比15%増)となり、一般寄付、指定募金ともに増加しました。しかし、総額は若干減少しています。新規のご支援が増加する一方、継続したご支援者が減少しています。指定募金は報告作業が複雑化しており、改善が必要です。企業、助成団体、政府資金からのプロジェクトご支援も、若干減少しています。活動報告会などを通じ、新規のご支援もありますが、長期継続は難しく、現場の変化に即したプログラムを企画することが必要です。

■ボランティア

継続的なボランティアは約30名で、大学生も増え、昨年に比べて増加。イベントや会の運営により積極的に関わるなど、事務局の慢性的な人手不足を補っています。外部の学習会や他NGOとの共同企画も行われました。

ボランティアが責任を持てる範囲について、議論もし、会員制度の話し合いのなか、ボランティアの担うところを明確にしようと、「ボランティアの心得(契約)」の作成準備が進んでいます。

Ⅲ.ラオス事務所

■体制

所長・スタッフの人事考課制度を見直し、客観的な評価と目標管理の考え方を取り入れ、スタッフの能力向上を図っています。事務所就業規則もまとまりつつあります。

顧問として会をリードしてくれたドアンドゥアン・ブンニャヴォンさんが、顧問を辞任し、ダラー・カンラーさんの後任として迎えました。ダラーさんは、情報文化省副局長として、子ども文化センターを当会とともに立ち上げた方で、ラオスの文化リーダーの一人です。広い視野から当会のプロジェクトを見つめ、事務所運営とスタッフの育成に期待をしています。プログラム担当のボーケオが1月末で退職、所長のソンペットも6月末で退職しました。新規スタッフ2名を採用し、ダラーさんのもとで、従来の家族的運営から組織的運営へと方向転換していきます。



ラオス事務所での会議風景

■現地での資金調達

今年も、ラオスにおいて、カナダファンド、フランス語センター、GAPE、Save the Children UK、民際センターラオスなど外国政府機関、NGOなどの団体からの資金提供、共同プロジェクトにより、出版、図書配付、図書室設置を行いました。さらなる新規資金提供者の発掘をめざします。

■広報

ラオスでは、事務所への個別のお問い合わせへの対応や来訪者を通しての広報が最も有効な手段です。日本語、英語の説明資料、年間活動報告書などを整備しました。ラオスで活動する国際NGOを紹介するホームページへも加入しましたが、会の紹介内容はまだ準備中です。

■イベント

- 7/15 外務省民間援助室 内田みどり氏視察
- 8/5 学習院女子大学伊藤ゼミ一行 交流会受入
- 8/12-14 『地球サポーター』取材
- 8/24 まいまい塾ネットワーキンググループ受入
- 8/26 うつくしま県民の翼(福島県国際協力・国際交流事業)一行受入
- 9/6 フィリピンのNGO「ルンドゥヤン」代表アイリーンさんが来訪
- 11/3 JICA沖縄教育視察団 受入
- 11/4 車輛贈呈式(ポリカムサイCCC)
- 12/19 国際ボランティア貯金現地調査 受入
- 1/29「読書推進コンサート」に協力(情報文化省・教育省・JICA主催)
- 2/3 ヱィエンチャン子ども教育開発センター(CEC)引渡式
- 3/12 子ども教育開発センター(CEC)イベント開催
- 3/14 子ども教育開発センターにて NGOミーティング(JANM)五月女大使との意見交換会
- 4/20 学習院女子大学研修下見
- 5/27 財団法人現代人形劇センター理事塚田千恵美さん訪問
- 5/31 「子どもの日」イベント参加

■対外活動

ラオス事務所駐在赤井朱子が、ラオスで活動する日本のNGOによる月例NGOミーティング(JANM)に出席、情報交換を行いました。

■名称変更

日本で「ラオスのこども」と名称を変更したことに伴い、ラオスでも名称変更を検討してきました。4月にラオス外務省の認可が下り、正式に名称変更しました。ラオス語: サマコム・フナムナムチャイ・カップ・デックノイラオ(「ラオスの子どもと心をつなげる会」の意) 英語: Action with Lao Children(「ラオスの子どもと共に行動を」の意)です。

■コンクール応募

CCCの講座の成果発表の意味も込め、日本の紙芝居や絵画コンクールに応募しました。

- 7月 第14回箕面手づくり紙芝居コンクール
大阪府 応募 37作品 受賞 1名
- 11月 第5回手づくり紙芝居コンクール
神奈川県 応募 27作品 受賞 1名
- 3月 第14回世界子ども愛樹祭コンクール
福岡県 応募 87作品 受賞 2名

2004年度 会計報告 2005年度 収支予算

2004年7月1日～2005年6月30日

2005年7月1日～2006年6月30日

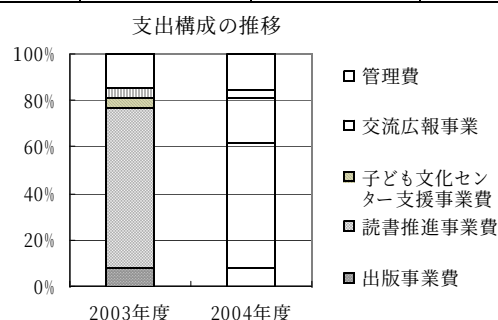
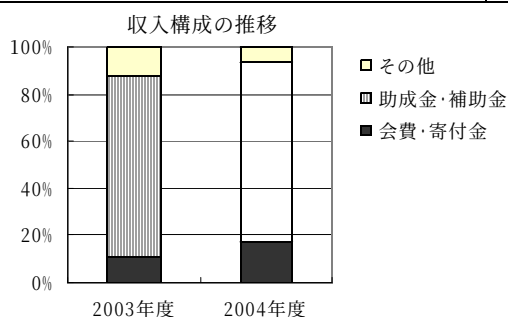
I 収入の部

(単位:円)

科目	2003年度決算	2004年度予算	2004年度決算	2005年度予算
会費・寄付金 小計	7,093,354	7,575,000	8,631,674	6,075,000
内訳 一般寄付金	2,427,012	4,000,000	5,473,591	4,000,000
活動会員年会費	52,294	75,000	49,500	75,000
指定募金	4,614,048	3,500,000	3,108,583	2,000,000
助成金・補助金 小計	49,697,638	38,700,000	37,672,225	18,000,000
内訳 民間一般助成金	7,862,820	10,000,000	7,923,985	10,000,000
政府系補助金・助成金	29,515,707	25,700,000	28,839,983	6,000,000
補助金・助成金(現地受取)	12,319,111	3,000,000	908,257	2,000,000
その他 小計	7,874,483	4,500,000	3,375,297	3,600,000
内訳 交流広報事業による収入	3,247,366	4,000,000	2,801,476	3,000,000
ASPB ラオスの子どもに絵本を送る会からの事業継承収入	4,068,074			
雑収入	559,043	500,000	573,821	600,000
当期収入合計	64,665,475	50,775,000	49,679,196	27,675,000
前期繰越収支差額	5,305,582	14,362,089	14,362,089	9,171,987
収入合計	69,971,057	65,137,089	64,041,285	36,846,987

II 支出の部

科目	2003年度決算	2004年度予算	2004年度決算	2005年度予算
事業費 小計	47,614,726	47,458,070	46,335,623	26,026,240
内訳 出版事業費	4,331,550	4,642,550	2,736,337	7,609,200
読書推進事業費	38,062,131	28,445,825	28,298,838	12,579,240
子ども文化センター支援事業費	2,755,997	12,039,695	10,687,040	3,271,800
交流広報事業	2,465,048	2,330,000	4,613,408	2,566,000
管理費 小計	7,994,242	10,904,525	8,533,675	7,992,480
東京事務所経費 計	6,773,717	9,601,000	7,576,723	6,516,000
内訳 家賃・水道光熱費	558,000	558,000	558,000	558,000
通信費・運搬費	171,645	169,000	224,106	222,000
事務費・記録費	216,241	240,000	229,841	216,000
広報費		620,000	571,556	550,000
人件費・交通費	5,370,358	7,584,000	5,650,648	4,600,000
備品消耗品費	112,245	90,000	0	30,000
諸会費・会議費	87,800	140,000	192,946	190,000
雑費	257,428	200,000	149,626	150,000
ラオス事務所経費 計	1,220,525	1,303,525	956,952	1,476,480
内訳 家賃・水道光熱費	439,093	365,700	89,770	219,600
通信費	45,003	48,300	22,061	43,200
事務費・記録費	48,677	69,000	49,138	72,000
人件費・交通費	400,657	449,075	620,550	914,880
備品消耗品費	120,973	124,200	64,328	64,800
雑費	166,122	247,250	111,105	162,000
予備費		1,500,000		1,500,000
当期支出合計	55,608,968	59,862,595	54,869,298	35,518,720
当期収支差額	9,056,507	-9,087,595	-5,190,102	-7,843,720
次期繰越収支差額	14,362,089	5,274,494	9,171,987	1,328,267



I.プロジェクト運営

■出版

子どもたちに今どんな本が必要かという視点から出版し、質の向上を目指します。本の販売も開始します。

1)出版委員会

- 出版物の質、多様性の向上を図るため、当会が出版した図書の評価を実施。委員会からの希望もあり、日本人専門家による外部評価を実施する。
- 委員5名と非常勤の編集担当者を配置し、出版の円滑化、効率化を図る。
- 若手作家向けに資料図書を閲覧できるようにする。

2)子どもの本の出版

- 8作品(各5,000冊)を出版。1作品は海外文学の翻訳とする。
- 資金の多元化を図り、2作品分は現地調達する。

3)作り手の発掘、多様化に向け、長編コンクール開催

4)本の流通システムの形成

- 事務所内に本の販売コーナーを設置する。
- 他団体への有償譲渡を促進し、収益を確保する。

5)紙芝居

日本のコンクールで入賞した作品、子どもが描いた作品を中心に、2作品を出版。

■読書推進活動

1)環境整備

JICAとの開発パートナー事業が12月に終了。フェーズⅡを計画、読書推進活動の環境整備を継続します。

- 費用対効果を意識し、効率的な図書 配付・図書室開設を行うため、図書配付基準、学校図書室設置基準について、詳細なものを整備する。
- 昨年、図書箱・図書袋を配付した学校136校に対し、図書の補充とフォローアップセミナーを実施する。
- 学校図書室(ハクアーン)を10校にて新規開設、既設の135か所に図書を補充。設置年数、活動状況などにより、段階をつけて実施する。
- プロジェクトの自立と併行して、図書を配付、図書室を開設した学校へのフォローアップも考慮する。

2)システム化と人づくり

活動の持続・自立へ向け、教員養成校を拠点とした人材育成とカリキュラム運用への支援を継続します。

○教員養成校で読書推進セミナーを受講して教員となった学生のフォローアップ調査を実施。教員

養成校での読書推進カリキュラム化事業のまとめの評価を行う。

- 改訂作業を終えたハンドブック(テキスト)を印刷し、教員養成校にて試用。同内容を他で行うセミナー内容にも反映させる。
- 昨年の研修に参加した教育指導官と読書推進担当官との連携を保ち、各地域の活動状況の把握する。
- 次年度の学校図書室事業評価会議に向け、開設後5年以上経過した図書室を中心に、活動状況のフォローアップ調査を実施する。

3)普及・定着

図書活用を定着させ、学校から地域へ、教育の場から生活の場へと普及するため、以下を行います。

- マスメディアを使った啓発広報を検討。
- 読書啓発雑誌発行を発行し、現場の教員や子どもへの働きかけを強め、意欲を高める。
- 「読む」中心から「書く」も含んだ活動へ発展させる。
- 他機関が実施する子ども向け絵本・作文コンクールに積極的に協力する。
- 積極的に読書推進活動を行う学校の表彰を促進。

■子ども文化センター

CCCが持続可能な運営が行われるよう、館長、スタッフ、指導員、青年OB・OGと理念の共有を深め、地域との連携を深めます。

活動面では「子ども参加」を促進します。子どもたちはCCCに何を期待しているのか、センターはどう応えられるのか、新任顧問のダラーさんを中心に、今後の展望を作り上げます。

近年、CCCの資金調達が難しく、活動の意義を積極的に伝え、スポンサーを見つけていく必要があります。



ヴィエンチャンCEC

- 9館の運営支援を継続。
- 館長に運営・資金調達能力向上の研修を実施。

- 小規模CCCの活動を把握するため、ヴィエンチャンからスタッフを派遣し、情報交換する。
- プログラムを多様にするため、スポーツ用品、ユニフォームを獲得する。各CCCが企業や団体から自己調達できるよう、当会がサポートする。
- 子どもに提供するプログラムの質を向上させるため、また、近年、読書推進分野の活動が停滞化していることから、スタッフのトレーニングを行う。

■自立支援 青少年支援

- 子どもを取り巻く様々な問題への対応を準備します。
- 各センター(CCC/CEC)において、青少年ボランティア活動を支援。
 - 「特に困難な状況にある子どもたち」(CEDC)へのサポートを模索。ラオスでの状況把握、支援のニーズについて、各センターや他のNGOなどから情報収集をすすめます。

■調査

図書配付時の子ども調査を継続。データー処理をすすめて、子どもの実像を把握する努力を続けます。データーがまとまった段階で公開します。

Ⅱ.国内事業

■広報

- 目的に合わせた多様な広報手段を開発します。
- ホームページを全面刷新し、活動情報、ラオス情報の充実と頻繁な更新を心がけます。英文ページの作成、新しいパンフレットの制作、訪問ツール、DMなどの開発、イベント用、ボランティア向け紹介ツールの開発などを実現します。
- 年次報告書を日英語で本年も発刊します。
- ニュースレターは年3回発行を継続します。ラオス情報を充実させ、読みやすい誌面づくりを工夫します。
- 100作品出版を記念する「ラオスの絵本100冊展」(仮)を日本とラオスで開催します。
- メディアへの情報発信も積極的におこないます。

■イベント

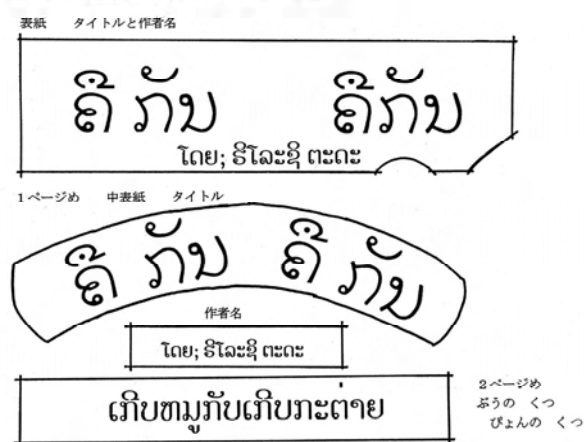
会主催のイベントを増やし、会のメッセージを対外的に発信するチャンスを増やします。他のイベント参加は、戦略を明確にし、効率的な参加をすすめます。

■ラオス語絵本プロジェクト

新作だけでは必要量がまかなえないラオスで、日本の絵本にラオス語訳を貼った本は人気があります。関東圏以外にお住まいの方や、企業、学校単位の参加が可能で、活動支援の大切なツールでもあるこのプロジェクトは、今年も積極的に推進します。このプロジェクトの意義をより伝達できるよう、イベントを同時に開くなど工夫します。

おんなじおんなじ 1/4

※ ページは、前から順番に数えて下さい。
※ ラオス語訳は、日本語の上に重ねて貼って下さい。



ラオス語翻訳シート

■書き損じハガキ収集キャンペーン

手軽に参加できる「書き損じハガキ返送用封筒」を開発し、ハガキ1万枚相当の成果をめざします。

Ⅲ.組織運営

■全体運営

スタッフが交代し、新体制を確立させます。ラオス側で意欲的なプログラムを作っても、資金提供ができず、頓挫してしまうことがあり、東京事務所の存在が問われる年になります。緊急課題として東京事務所の人材強化、優先順位を明確にする必要があります。

理事会 理事の増員を図り、理事の仕事量の平準化、低減をはかります。また、理事会で決定すべきことを削減し、会議負担の軽減をはかります。

会員 活動会員、賛助会員の概念、ボランティアの位置づけを明確にし、会員登録の意思確認をしやすくして会員を増やします。新たな会費制度を導入します。



☐ 東京事務所

〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12,303

TEL/FAX 813-3755-1603

E-mail deknoylao@yahoo.co.jp [Http://deknoylao.org](http://deknoylao.org)

☐ ラオス事務所

035/3 NOUAI 05 SAMSENETHAI RD. SIHOM CHANTHABURY,
VIENTIANE LAO P.D.R. P.O.BOX1518

TEL/FAX 856-21-21-3449

E-mail [aspb @ laotel.com](mailto:aspb@laotel.com)